三浦市立三崎小学校

研究テーマ：子どもが子どもの言葉で語り合う

１、実践の目的

本校は、151年目を迎える歴史と伝統があり地域から愛されている学校である。児童数の減少により、数年前から全学年が単学級となった。しかし、単学級であるからこそ、学年の枠を越えて交換授業や合同授業などを行い、多くの教員の目で多面的に子どもたちの姿をとらえることができる。その点を長所と捉え、子どもが何を学ぼうとしているのか、子どもに何を学ばせたいのかを子ども一人ひとりに寄り添いながら、教員が授業展開を考えていくことを大切にしている。

昨年度の研究の反省から、学ぶことに対して意欲的ではあるが、話し合い活動では、特定の子が話をする、また自分の考えを持っているのに話せない子どもがいることが指摘された。本年度は子どもが子どもたちの言葉で語り合えるような授業づくりを目指すこととした。

２、実践の内容

（１）校内研究について

本研究テーマは１年目であることから、以下の点について職員間で話し合いをした。

①学年や教科によってどのような語り合いの場面が設定できるか

②語り合いのための事前の手立てについて

授業研究会は、学級担任・専科教員を含め、全員公開とし、多くの実践を積む中で、子どもの姿を中心に協議を進め、どのような語り合いがあるのかを、検討・議論した。

（２）基礎・基本の定着に向けて

全学年で月曜日に「ことばのトレーニング」を実施し、語彙力の向上を目指した。昨年度の反省を生かして、同じ問題を３回連続して解くことで、子どもたちの意欲や定着の向上を目指した。また、それらの取り組みをファイルで保存し、自分が取り組んだ足跡を振り返り、自分の成長を自覚できるように進めた。

３・４・５・６年生は、「算ノート」（計算問題が５問載ったプリントを貼っていくノート）を毎日宿題に取り組んだ。計算は学習進度に関連せず、毎日継続的に取り組むことで、計算力の向上を目指した。

また、タブレットを利用して個別最適な学びの一つとして、AI ドリル「Qubena」を利用して個々の課題に継続的に取り組み、基礎・基本の定着を目指した。

（３）講師の先生による研修会

厚木市立緑ヶ丘小学校の芳賀先生に児童理解を深めるための講演を行っていただいた。

３、実践の成果

（１）校内研究について

大きな周年行事がある中、全教員の授業公開を計画的に進めることは難しい課題であったが、代表者授業を年次研の授業と兼ねて行ったり、また学年部間での検討・参観にしたりすることで、全学年での語り合いを取り入れた授業を行うことができた。また、目の前の子どもたちに合わせて、語り合う姿を想像しなら授業を組み立てることで、

どの授業でも成果や課題を見つけることができた（図１）。例えば「語り合う姿」の具現化には、子どもの姿を想像しながら授業を構築することが必要である（視点の転換）。また、「語り合う姿」の具現化には、自分事で考えやすいような仕掛けや手立てが大切である。などである。

（２）基礎・基本の定着に向けて

図１　研究授業の様子（１年生：生活科）

語り合う土台として、語彙力は必須であり、低学年のうちから、様々な言葉にふれあい、意味を理解することは大切である。「ことばのトレーニング」では、継続的に取り組むことで、言葉に対する抵抗感は小さくなり、楽しんで取り組む子どもたちが増えたという実感を多くの教員がもっている。

「算ノート」を毎日宿題にする取り組みは、各学年の実態に合わせて、柔軟に取り組み方の模索をしながら行った。

（３）講師の先生による研修会

教育相談 Co.を務め、横浜国大のソーシャルワークの視点を持った教員養成研修の受講者である芳賀先生に来校いただき、実態にあった学級目標の設定や、学校のスリム化、学校のニーズと役割の明確化など、多くの発見があった。

４、今後の展開

「語り合い」の場面を取り入れた授業展開については、学年の発達段階や、教科・単元を見通し、しっかりと子どもたちの思考を教師自身が想定しながら授業を作る大切さを学んだ（図２）。また、授業場面に限らず、日頃の学校教育の中からの実践が大事である。語り合う前の土台や仕掛け、環境づくりが整った上で、実現できるテーマだと改めて感じる。さらに、子どもたちの学びの姿を学校全体で見直し、共通理解し、継続的に取り組んでいくことが重要であると考える。子どもたちが自分たちで進んで、「話したい、語りたい」と実感できるような教材（地域素材など）を活かしながら教育活動を充実させていきたい。カリキュラム・マネジメントも意識し、職員間での共通理解・情報共有を進めていきたい。

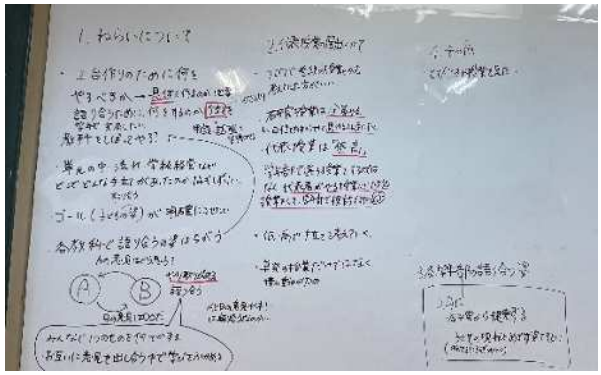

図２　研究全体会（２月）

基礎学力の向上について、今後はさらに語彙の活用の場面を「書く・話す・聞く」という次のステップへ続けられるような活動につなげていきたい。学力はもちろん、継続力の強化にもつなげるためには、子どもの実態に合わせた取り組みが必要である。また、語りの場面を日常から取り入れられるよう、学校全体に呼びかけ、朝の時間などに短いスピーチの実践など、今一度、職員で情報共有しながら精査し、充実した取り組みにできるよう見直していきたい。